

日本宗教学会 第 81 回学術大会

パネル発表要旨集

学術大会 会期：2022 年 9 月 9 日(金)～11 日(日)

9 日：対面・オンライン 10 日・11 日：オンライン

主催：日本宗教学会第 81 回学術大会実行委員会（愛知学院大学）

開催パネル一覧（オンライン）

9 月 10 日 (土)	パネル題目	代表者
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 1	宗教史の中の IAHR と宗教現象学	藤原 聖子
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 2	吉永進一とは何者か？－その研究の軌跡を問う－	岩田 文昭
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 3	近世近代における暦の流通と宗教文化	下村 育世
15 : 00 – 16 : 40 meeting room 4	日印交流における仏教－日本の仏教者によるインド世界の探究－	外川 昌彦
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 5	人口減少社会における甲信越・東海・近畿地方の多宗派寺院調査	相澤 秀生
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 6	情報と生命－未来の宗教の役割を展望して－	冲永 宣司
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 7	宗教の公共性と〈公共宗教学〉をつなぐために	宮本要太郎
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 8	軍事占領の宗教学－『占領改革と宗教』刊行とその現代的意義－	中野 毅

9 月 11 日 (日)	パネル題目	代表者
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 1	虚実性の宗教哲学－「宗教」概念の死後の生－	根無 一行
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 2	Esotericism, Occultism, and Spiritual Therapies during the Long Twentieth Century: Theoretical Implications	Ioannis GAITANIDIS
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 3	陰陽師の虚像と実像	小池 淳一
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 4	井筒俊彦と東洋の思想家たち	澤井 真
15 : 00 – 16 : 40 meeting room 5	寺院経営と護持の展望－布施・寄付・会費－	深水 顕真
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 6	宗教における AI 等先端技術の社会実装とその課題	木村 武史
15 : 00 – 17 : 00 meeting room 7	震災伝承の宗教性－施設・担い手・行為・環境－	弓山 達也

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

宗教史の中のIAHRと宗教現象学

代表者：藤原 聖子

IAHR ローマ大会におけるペッタッツォーニとヴァティカン
エリアーデにおけるIAHR創設とナショナリズムの問題
ハイラーにおけるIAHRと東西交流

江川 純一(明治学院大)

奥山 史亮(北海道科学大)

宮嶋 俊一(北大)

コメンテータ：カチャ・トリプレット(ライプチヒ大)

司会：藤原 聖子(東大)

本パネルは、国際宗教学宗教学会(IAHR)の設立・初期の展開と、既成教団や非制度的宗教潮流との関係について新たな知見を発表する。依拠する資料は、R・ペッタッツォーニ、F・ハイラー、M・エリアーデを中心とする、「宗教現象学」とまとめられてきた宗教学者・宗教史家の著作物、書簡、新聞雑誌記事、IAHR側の記録などである。

最初に藤原が本パネルの意義について、IAHR史を含む宗教学史に関する近年の研究と論争(L. Ambasciano, D. Wiebe, D. G. Robertson等)を批判的に参照しながら説明する。それらの研究に共通するのは、科学的な「良い宗教学」と宗教的な「悪い宗教学」の二項対立を予め設定し、前者が後者によってしばしば浸食される過程として歴史を描くこと、また、後者の利害関係者として宗教団体を置くことである。しかしそれは現在の特定のアジェンダに基づく歴史の単純化であり、当時の宗教学者一人ひとりの研究・社会活動の軌跡をたどれば、宗教団体との関係は、その宗教学者の研究上の立場が科学派か宗教派かで決まるわけではないことが見えてくる。そのような歴史理解は、現在の宗教学が二項対立に拘泥しない自己理解を得るために必要なステップであると考えられる。

第一発表者の江川は、1950年にIAHR会長に就任したペッタッツォーニに焦点を当て、1955年のIAHRローマ大会とヴァティカンの関係を取り上げる。既に1916年にペッタッツォーニらが創刊した雑誌がヴァティカンによって禁書処分を受けていた。宗教学史というディシプリンそのものと、その国際学術大会のローマ開催に対して、ヴァティカンはどのような反応を示したのか。また、ヴァティカンとペッタッツォーニのあいだにいかなる葛藤と調整が存在したのかについて一次資料を基に分析する。

第二発表者の奥山は、エリアーデが特定の教会(宗教)ではなく宗教一般の護教に変化した過程に注目する。大戦間期、エリアーデはルーマニア民族性の根源は正教会に在るものと

考え、正教会の精神性を活性化することでNationを再構築しようとした。さらにカトリックとNationを統合するサラザール体制をモデルにしながら、対ボリシェヴィキの精神的連帯を形成することを試みた。戦後、共産党との対決において戦前のナショナリズムを転換するわけにいかず、しかし新たな国際秩序に適応することを迫られたエリアーデは、前者の言論を亡命者向けに保持しながらも、後者に応じるためにIAHR創設にかかわり、戦前の著述からナショナリズム性を取り除くことで宗教現象学を形成したのではないかと。ペッタッツォーニ、亡命者組織の中心人物B・コステらとの書簡資料等を通して検証する。

第三発表者の宮嶋は、ハイラーとカトリック教会・アジアの宗教者の関係を取り上げる。第二次大戦前、ハイラーの関心はもっぱらローマ・カトリック教会批判とキリスト教のエキュメニズム運動にあったが、戦後その関心は諸宗教の協働へと拡大する。その際のキーワードは「東西の出会い」であるが、それはハイラーも参加をした戦前のエラノス会議から戦後のIAHR(東京-マールブルク)大会へと継承されたテーマでもあった。とりわけ戦後、ハイラーはIAHR大会を契機として、日本の宗教者・宗教学者と交流を深めつつ、東アジアへの関心を深めていった。ローマ大会から東京・マールブルク大会に至る転換(宗教研究の現在性・実践性)とそこで果たしたハイラーの役割、さらにそれに影響を与えた宗教者とのかわりなどについて整理し、報告する。

コメンテータのトリプレットは、IAHR史やマールブルク大学の宗教学の伝統に詳しく、オットーやハイラーに関する展示を含むマールブルク宗教博物館の企画運営に貢献している。今後、本パネルの内容を、誤解を生まないように海外に向けて発信していくための、有益な応答が得られることと期待している。

吉永進一とは何者か？—その研究の軌跡を問う—

吉永進一の略歴と研究の特徴
 吉永進一の神智学研究
 吉永進一の霊学思想研究
 吉永進一の民間精神療法研究
 吉永進一の近代仏教研究

代表者：岩田 文昭
 岩田 文昭 (大阪教育大)
 赤井 敏夫 (神戸学院大)
 並木 英子 (国際基督教大)
 栗田 英彦 (佛教大)
 末木文美士 (国際日研)
 司会：岩田 文昭 (大阪教育大)

2022年3月31日、宗教学者の吉永進一(1957~2022)が逝去した。その早すぎる別れを悼み、その業績を称える声が世界各国から寄せられた。その研究の一端は『近現代日本の民間精神療法』(共編著、2019年)や『神智学と仏教』(2021年)として公刊されているが、吉永の研究は多方面にわたるため、その全貌が示されているわけでない。

そこで、本パネルでは略歴と研究の特徴、神智学、霊学思想、民間精神療法、近代仏教という観点から、吉永の研究の軌跡を問い、その研究の意義を明らかにすることを試みる。

各発表の概要は、以下の通りである。

①岩田文昭「吉永進一の略歴と研究の特徴」：吉永は、必ずしも宗教学の権威・大家という存在ではなかった。ところが、従来の思想研究の枠に収まらない領域の研究を開拓し、国内外の多くの研究者に知的刺激を与え、新たな形態の研究を先導した。この吉永の研究の原型は学部学生時代の「京大 UFO 超心理研究会」などのサークル活動にある。その活動の特徴は学際的あるいはハイブリッドとでもいうべきものであり、自由討究を旨としていた。このような吉永の研究の特徴を示すとともに、そこに残された課題を考察したい。

②赤井敏夫「吉永進一の神智学研究」：吉永の神智学研究の軌跡を追うと、ある時期から新仏教研究と並行して進展したことが分かる。平井金三文書の調査に携わったことが一つの転換点で、これを通じて神智学への学術的視座が、新仏教研究新展開の契機となりうることを認識することとなったのは大きい。こうして後の神智学協会京都ロッヂの全体像解明から、松ヶ岡文庫の調査を介した鈴木大拙の再評価へと直結する途が開かれた。こうした軌跡を吉永自身の思想的変遷のもとに文脈化して、本人が開拓した国際的ネットワークとの関連も考慮して評価するのが、本研究の主旨である。

③並木英子「吉永進一の霊学思想研究」：吉永の最晩年の業

績として、静岡県静岡市における御徳神社家宮城島家及び、月見里神社家吹田家所蔵の「霊学史料」の新発見がある。吉永は2018年1月に宮城島家において、本田霊学の神主であった宮城島金作の率いた神道三徳教会史料を見つけ出し、続いて、3月に本田親徳の駿河門人であった月見里神社祠官長澤雄楯と出口王仁三郎の書簡を含む稲荷講史料を見つけ出した。本発表では、吉永の新史料の発見が「霊学研究」に与えた功績を踏まえつつ、吉永が「霊学研究」を近代日本宗教学において、どのように位置付けていたかを明らかにする。

④栗田英彦「吉永進一の民間精神療法研究」：吉永の民間精神療法研究は、宗教社会学系の新宗教・スピリチュアリティ研究と同時代性を持ちながら、それと異なる場から生じた。その場とは、古書収集と(治療/政治)実践の「余白」に生じ、井村宏次や武田崇元らによって開拓された在野の霊術・霊学史研究である。吉永の民間精神療法研究は、この余白をアカデミズムに注入するものに他ならない。その余白は近代仏教史研究発展の源泉となり、現在は近代神道史・キリスト教史にも波及してメディア宗教研究を促進しつつある。吉永の民間精神療法研究の特徴と、それが宗教研究にもたらした意義を考察してみたい。

⑤末木文美士「吉永進一の近代仏教研究」：吉永は当初オカルトや神智学の研究で名を知られていたが、2010年代になるとその領域を大きく広げ、近代仏教研究の先頭に立つようになった。これ以後の吉永は、個人研究よりも共同研究のリーダーとして、一方で若手研究者を動員して綿密な資料調査を進めるとともに、他方で内外の幅広いネットワークを生かして多分野の研究者と共同でシンポジウム、パネル、研究会などを組織し、多方面から問題に切り込むというスタイルを確立した。『新仏教』研究から大拙研究に至る、晩年の吉永が切り開いた世界を、近代仏教研究の展開史の中で考えてみたい。

近世近代における暦の流通と宗教文化

代表者：下村 育世

大雑書にみる近世の暦注観－『簠簋内伝』との関わりを中心に－ 馬場真理子 (東大)
 近世後期における三島暦師の頒暦－江戸暦問屋との比較を中心に－ 小田島梨乃 (東大)
 奈良弘暦者・吉川家の近代－暦と神宮大麻との関わりに注目して－ 下村 育世 (一橋大)
 近世の仏教暦と梵曆社中－僧侶の編暦・造暦・頒暦と近世社会－ 岡田 正彦 (天理大)

コメンテータ：中牧 弘允 (吹田市立博物館)

司会：岡田 正彦 (天理大)

暦には、日付だけでなく、多様な情報が掲載されている。中牧弘允は、暦に表現される情報がいろいろな文化資源と複雑に結びつくことに着目し、暦を通じて文化を理解する「考暦学」を提唱する。日本においても、近世の暦には陰陽道の知識に基づく暦注が、近代の暦には暦注の代わりに皇紀や皇室関連の祭日などが掲載された。暦は、宗教文化や地域文化、場合によっては政治性などと結びつく多彩な情報の発信メディアとして、一般の出版物とは桁違いの部数で広範に流通した。本パネルは、こうした情報と宗教文化との関わりを人文学的見地から読み解くと同時に、その「流通」の側面まで包摂して考察する目的で企画されている。暦の流通のあり方と変化を問うことは、暦の内包する文化の到達範囲と変化をも見定めることに繋がるだろう。

大雑書は暦注をはじめとする多様な占いを載せた日用書の一つで、近世には百種類以上の大雑書が出回った。馬場真理子の発表では、その暦注観の特色について検討する。先行研究で大雑書の主な情報源として名が挙げられてきた『簠簋内伝』は、暦注に関して牛頭天王信仰や仏教が混じり合う独自の世界観を提示しており、その暦注観は中世後期から近世にかけて広く流布した。多くの大雑書にも『簠簋内伝』の影響がみられるが、その暦注観は絶対的なものだったわけではなく、大雑書の中で時に批判され、時に別系統の暦注観と組み合わせられるなどして、常に相対化されつづけてきた。これら『簠簋内伝』と競合した暦注観、そしてその理由の考察を通じて、近世の暦注観の一端を探る。

岡田正彦の発表では、普門円通を開祖とする梵曆社中の人々が刊行・頒布した現存する嘉永2年の仏暦を取りあげる。近世から近代にかけての民間暦の歴史は、これまで仏教の僧侶が各地で刊行した仏暦についてほとんど言及してこなかった。本発

表では、彼らの編暦・造暦・頒暦活動の実態を明らかにし、近世社会における僧侶の役割について再考する。

非会員枠で発表を依頼した小田島梨乃は、三嶋大社(静岡県三島市)から発行され、その起源は鎌倉時代と推測される三嶋暦を取りあげる。版暦として最も早く広域に普及したが、貞享改暦(1685)以降、頒布地域を伊豆一国に限定され、隣接地域は伊勢御師や江戸暦問屋が担うこととなった。先行研究においては、三嶋暦師である河合家の文書の翻字・解題は見られるものの、他地域の暦師との比較研究は殆ど見られない。本発表では、河合家文書や借金証文等の史料を用いながら、主に文化年間以降(1804～)の三島暦師の活動状況について、隣接する江戸暦問屋と比較しつつ論じる。

下村育世は、奈良・吉川家の史料(国立歴史民俗博物館蔵)をもとに、地方ごとに活動した近世の暦師や暦問屋に出自を持つ弘暦者による、近代の国家的に統制された造暦・頒暦や大麻頒布に関わる活動の一端を明らかにする。吉川家は、近世期には他の地方暦師と潜在的な競合関係にあったが、近代以降、協働して全国規模の頒暦商社を結成、一元的な全国頒暦の一翼を担う。明治15年、官暦が伊勢神宮から頒布される制度の確立により、彼ら弘暦者は撤退するが、従来解明されてこなかったそこに至るまでの頒暦方法や、一部史料で言及される大麻に添えて頒布したとされる暦の実態の一端を明らかにし、制度確立以前から暦と大麻が共に頒布された背景や意味も考察する。

「考暦学」を提唱し、日本カレンダー暦文化振興協会の理事長でもあるコメンテータの中牧弘允には、パネル全体を俯瞰した見取図を示してくれることを期待している。また近世の暦師や暦問屋に造詣が深い小田島梨乃をパネルに迎えたことで、暦の流通状況や各地方の暦師同士の関係などについて、歴史的な比較を可能としよう。

日印交流における仏教—日本の仏教者によるインド世界の探究—

日本人仏教者とインド

明治インド留学の潮流—川上貞信、大宮孝潤他—

岡倉天心とインド知識人との仏教史観をめぐる対話

ブッダガヤを中心とする日系仏教団体の活動

代表者：外川 昌彦

蓑輪 顕量 (東大)

奥山 直司 (高野山大)

外川 昌彦 (東京外国語大)

別所 裕介 (駒大)

司会：外川 昌彦 (東京外国語大)

本パネルは、JSPS 二国間交流事業「ブッダガヤへの日本の巡礼者—インドにおける仏教復興運動と日印交流」(2016-18年度、共同代表：ランジャンナ・ムコパディヤーヤ・外川昌彦)のメンバーによって、前近代の天竺世界から近代の仏教学的知見を踏まえたインド世界への探究に至る、日印交流における仏教の問題を検証する。

本プロジェクトは13名のメンバーから構成され、奈良時代の菩提僊那(ボーディ・セーナ)にはじまり、蓑輪顕量(「日本人仏教者とインド」)が論じるように、インド渡航を目指した高丘親王や明恵などの前近代の日本における多様な天竺世界との結びつきが検証され、それを踏まえて、明治近代以降の近代仏教学の日本への移植と仏教的知見の源泉としてのインド世界を探索する、日本の仏教者の多様な取り組みが検証される。

明治近代の日本では、近代仏教学への関心から、多くの留学生が西洋諸国を訪れるが、特にマックス・ミュラーの薫陶を受けた南条文雄や笠原研寿、高楠順次郎、ドイツ留学の井上哲次郎やパウル・ドイセンに師事した姉崎正治などが知られている。

他方、西洋諸国への留学とは別に、仏教の源流としてのインド世界への関心から、南アジアに渡航する日本人仏教者も多く見られた。奥山直司(「明治インド留学の潮流」)が論じるように、1886年の釈興然のセイロン留学を皮切りに、日本仏教界にセイロン・インド留学の気運が生まれ、各宗派の僧侶の渡航が相次いだ。1889年、オルコットとダルマパーラの来日を契機にセイロンに渡った真宗僧侶の一人、川上貞信は、その後カルカッタに転学し、さらにチベットを目指した。大宮孝潤は1895年に旅立ち、ボンベイ、コロンボ、カルカッタでサンスクリット等を学んだ。

日印間の貿易の拡大に従い、1893年にはボンベイ航路が開設され、日露戦争(1904-5)やスワデシ運動(1905)の前後に、人々の往来が加速する。『世界に於ける仏教徒』を著した能海

寛は1899年にチベット入りを試み、1900年にチベットに潜入してセラ寺で学んだ河口慧海は、その記録を『西藏旅行記』にまとめた。1902年には、アジア探検隊を組織した大谷光瑞は仏典に登場するラージギル遺跡の同定を行い、仏教美術の源流を尋ねてインドを訪れた岡倉天心は、外川昌彦(「岡倉天心とインド知識人との仏教史観をめぐる対話」)が取り上げるように、ヴィヴェーカーナンダらのインド知識人と、大乘非仏説論などの仏教史をめぐる議論を交わした。1906年にインドに渡った山上曹源や、1907年にチッタゴンに滞在した木村日紀は、カルカッタ大学では教鞭も執った。

このような明治日本のインドへの関心には、想像上の天竺世界でも、植民地下のインド社会の現実でもない、仏教的知見の真正性や正統性の源泉としてのインド世界への関心を見る事ができる。

他方、仏教が衰退したインドという認識は、ブッダガヤの荒廃した状況を見た釈興然が仏跡復興運動を呼びかけるように、インドで仏教を復興するという新たな運動も生み出した。例えば、日本山妙法寺の藤井日達は1930年にインドに渡り、仏教をインドに還すという西天開教の理念を掲げてインドで活動し、当初、日本山妙法寺で活動をした佐々井秀嶺は、後にインドに帰化してナーグプルで新仏教徒の運動を展開する。

こうした現代につながる仏教復興運動は、宗教ナショナリズムやダリト運動などの現代インドの政治潮流とも密接に関連しながら展開され、近年はグローバル・パワーとして台頭するインドによる多国間協力の枠組みを通じた「仏教外交」と呼ばれる政治状況も生み出している。別所裕介(「ブッダガヤを中心とする日系仏教団体の活動」)は、このような状況を踏まえて、ブッダガヤを中心とした仏教遺跡において、現地で活動する日本系仏教団体が、どのようなインド認識を保持しているのかを検討する。

人口減少社会における甲信越・東海・近畿地方の多宗派寺院調査

概要報告

寺院の形態と檀信徒の動向

寺院の年中行事と教化活動の特徴

寺院における葬送儀礼の概況

寺院収入の実態

代表者：相澤 秀生

相澤 秀生 (跡見学園女子大)

中條 暁仁 (静岡大)

川又 俊則 (鈴鹿大)

磯部 美紀 (大谷大)

梶 龍輔 (駒大)

司会：相澤 秀生 (跡見学園女子大)

本パネルは、科学研究費助成事業「基盤研究(C) 人口減少社会における仏教寺院の実態研究—多宗派のブロック調査」(代表：相澤秀生、研究課題・領域番号：20K00081)の中間報告である。日本社会は寺院(菩提寺)を支えてきた世代の人びとが多く死去する時代を迎えた。その次世代を担うであろう団塊の世代以下の人びとの多くが、故郷を離れ、菩提寺とは疎遠な関係にあり、代々の寺檀関係が継承される見通しが立たない現状に対し、寺院関係者は大いに危機を募らせている。では一体、寺院はどのような現状にあるのか。宗派や地域などによって差異はあるのか。質問紙調査によってその実態を捉えようと、同事業に参画するパネルメンバーを中心に検討を重ねてきた。

もちろん、寺院の実態を知るためには、仏教教団が傘下の寺院に実施する「宗勢調査」の報告書を参照すればよい。だが、調査時期、調査方法、調査内容が異なり、厳密な意味で統計的な比較が困難となっている。他方、宗教研究の分野においても、質問紙による教団横断的調査は前例がない。そこで、このような現状を打開し、宗規のそれぞれ異なる教団でも比較分析が可能となるよう、本パネルメンバーらで統一した規格の質問紙を策定し、多宗派調査のフォーマットを新たに開発した。

これに基づき、同事業では、全国に先駆けて寺院の兼務や無住化が進む甲信越・東海・近畿に所在する寺院約35,000ヶ寺のうち、多段無作為抽出による3,000ヶ寺を調査対象寺院とし、2021年7月に調査を行なった。その結果、質問紙572票を回収した(回収率19.1%)。うち、38票が無効票で、有効回答数は534票である(有効回答率93.4%)。集計の結果、特定の地域や宗派に大きく偏ることなく標本が得られた。コロナ禍で行なわれた調査であり、その影響を検討できる調査項目も設けているため、きわめて貴重な結果が得られたと考えている。

本パネルでは、ここで集計された数量データを主たる手掛かりとし、必要に応じて自由記述に書き込まれた質的データを援用して、多宗派寺院の実態を報告するものとする。

発表1の相澤報告では、質問紙を共有し、調査対象、調査内容、標本の特徴など、調査に関する基礎的な前提情報を解説する。

続く発表2の中條報告では、寺院の属性(本務・兼務・代務)、檀信徒数やその増減などに注目し、寺院の特徴を整理する。

これを受け、発表3の川又報告では、寺院の年中行事と教化活動に焦点を当てる。その実施状況や性格、檀信徒や他寺院の協力状況を捉え、ウィズコロナ禍における教化活動の対応の可能性(強靱さ/脆弱さ)を探る。

これと関連し、発表4の磯部報告では、寺院における葬送儀礼を取り上げる。年間の葬儀や法事の執行数に加え、導師のみの葬儀や直葬など、近年報告されている葬儀の簡素化がどの程度進んでいるのか確認するとともに、送骨や葬儀の生前予約、僧侶派遣の実施状況といった新たな葬送への取り組み状況も数量データとして提示する。

最後となる発表5の梶報告では、寺院経済を取り上げる。とりわけ法人収入は従前の研究でも指摘されるように、寺院構成員(僧侶や僧侶の家族ら)の生活や寺院の存続にかかわる重要な要素である。コロナ禍前後における法人収入の変化、葬儀や法事の布施額などに注目し、その概況を捉える。そのうえで、クロス集計を行ない、問題の広がりを確認してみたい。

以上の5発表を終えた後、質疑応答に移る。本パネルではコメンテータを立てず、フロアとの意見交換の時間を長く設けることにより、情報共有を深め、広く分析上の課題をあぶり出したい。これをもって、今後のさらなる事業展開(都市圏調査、全国調査)につなげていくものとする。

情報と生命—未来の宗教の役割を展望して—

人工知能と二つの文化
不死と AI
進化論と AI—最適化に対する宗教学的視座—
バイオテクノロジーに見る全体論の可能性
儀礼と科学技術

代表者：沖永 宣司
久木田水生 (名大)
沖永 宣司 (帝京大)
小原 克博 (同志社大)
林 研 (大阪経済法科大)
永原 順子 (阪大)
司会：沖永 宣司 (帝京大)

本パネルメンバーの多くは 2018 年より AI やロボットの社会的実装化や各種宗教における活用をめぐる共同研究を進め、本学会でも研究成果のパネル発表などを続けてきたが、その過程の中で科学技術と宗教との関係をめぐる原理的で基礎的な考察の必要性が痛感されるようになってきた。特に近年 AI などの情報技術が人間の学習、行動、などの意識現象、生命現象と深く関係するに到り、これらの情報技術と生命、宗教との原理的関係を考察する必要が生じた。

そこで本年度は発表者各自の問題意識から、情報が私たちの生命観や宗教の役割、世界観をいかに変えて行くかを考察するパネルを企画することになった。これは現代の宗教が科学技術の発展の中で急速に直面しつつある課題であり、未来の宗教の姿をさぐる試みでもある点に意義があると考えられる。

久木田水生「人工知能と二つの文化」は、現在の人工知能や機械学習による人々の行動・属性・能力の推測からもたらされる利益と、反対に人工知能の「活用」から生じる正確性、公平性、透明性、プライバシーなどに関連する問題に着目する。そしてこうした問題を、近代から現代にいたる科学技術の急激な発展と人文学的な価値の衰退という歴史的な文脈に位置づけ、現代の人工知能の隆盛が経済的な合理性だけではなく、人間のあらゆる側面を定量的に測定する近代以降の強い欲求に関係していることを論じ、人工知能と社会の将来についての展望を示す。

沖永宣司「不死と AI」は、意識をコンピュータにアップロードすることで不死が実現される時代が来るという議論に着目する。自分の情報を網羅したアンドロイドの完成や、コンピュータが意識を支配するシンギュラリティがそれを実現させるという最近の議論は、自己と他者、生と死、物と心といったこれまでの当然の区別を脱構築し、私たちが何者かについての根

本的な再考を迫っているからである。そこでここでは、将来あり得る生と死の姿についての議論の妥当性と問題点を、意識や情報、自己に関する哲学的な次元にまで立ち返って考察する。

小原克博「進化論と AI—最適化に対する宗教学的視座」は、米国キリスト教や近代日本の伝統宗教に大きな影響を与えた進化論を取り上げる。その中心点はダーウィニズムというよりスペンサー主義(社会進化論)であったが、それは生命の序列化を正当化する優生思想をも生み出した。人間社会の「最適化」が模索されたのである。現代の出生前診断、ヒトゲノム編集においても優生学的要素は潜在し、生命の「最適化」を見ることが出来る。AI による「最適化」をその連関の中で見ながら、過去・現在の「最適化」欲求に対する批判的考察を行う。

林研「バイオテクノロジーに見る全体論の可能性」は、科学における還元主義と全体論の関係を再考する。バイオテクノロジー領域では遺伝子至上主義的な遺伝子診断やゲノム編集技術が進められる一方で、体細胞クローンや iPS 細胞の技術によって細胞の初期化が可能になり、遺伝子以外の要素を含む全体的なシステムも注目されている。こうした生命や人間存在への全体論的視座が、生物学と宗教とを架橋し得るのかを考察する。また、人間の遺伝子を改変することの是非について、宗教的観点をも含めた全体論的人間観から考察する一例も示す。

永原順子「儀礼と科学技術」は、儀礼の場に浸透する科学技術に着目する。コロナ禍によって移動が制限されたこの数年間、ヴァーチャル参拝や神事のネット配信などに注目が集まった。これらは遙拝や代拝の拡大解釈として語られるが、インターネット空間が媒介役割にとどまらず、私たちの身体観を本質的に変容させている事実も示している。さらに人生儀礼の一つである葬儀でも、特に AI は弔いの形式や生と死の捉え方に影響を及ぼし、身体観や生命の有り様まで変化させつつある。これらが身体観および生命観を再構築する可能性を論じる。

宗教の公共性と〈公共宗教学〉をつなぐために

代表者：宮本要太郎

公共性へと架橋する信仰育成—天理教ひのきしんスクールを例に— 金子 昭 (天理大)
宗教学と開発援助 村上 辰雄 (上智大)
「公共宗教学」は可能か 平良 直 (倫理研究所)
宗教者の支援活動における寄り添いとつながり 宮本要太郎 (関西大)

コメンテータ：堀江 宗正 (東大)

司会：宮本要太郎 (関西大)

近年、苦の現場において支援活動に取り組む宗教者と、そのような取り組みを研究対象とする研究者との協働の機会が増え、改めて宗教研究そのものの「公共性」や研究者の立場性、さらに宗教研究におけるアドボカシーの意義について問い直されている。そのような議論を集約する場、実践と理論とが交錯する場としての〈公共宗教学〉の可能性を考えてみたい。

1. 金子発表

天理教ひのきしんスクールは、1980年に天理教版ボランティアスクールとして始まった。社会との有機的関わり、人々への寄り添い支援のノウハウを学ぶ学習の場として、今日まで約40年の歴史がある。布教伝道を目的とせず、社会貢献に徹したその姿勢は、昨今の臨床宗教師養成課程にも重なるところがある。スクールは当初、教えに基づくボランティア活動を「ひのきしん」という言葉で表現したが、近年ではこれもまた「おたすけ」(救済)だという位置づけが強くなり、このことは同スクールの課程内容にも現れてきている。本発表では、天理教ひのきしんスクールの40年間の変遷を検討することで、公共性へと架橋する信仰育成の一端を明らかにする。

2. 村上発表

今日、発展途上国において宗教団体またはその関連団体が開発援助の役割を担うのを目にするのは珍しくない。しかし一般的な開発機関の視点からは、特に保守的な伝統宗教や土着宗教が開発の妨げになっているという認識がまだまだ根強い。また、従来の開発援助の主たる目的が、人々の生活レベルの向上や物質的充足であるのに対し、宗教は本来、人々の心の平穏や精神的安心に主眼をおいてきたとも言える。このように近いようで今一つそぐわない開発と宗教の関係について、宗教の公共性に焦点を当てて理論的に整理し、さらにはポストコロニアル研究をふまえた宗教学が開発に対して何を提言できるかを検証するのが本発表の狙いである。

3. 平良発表

宗教の「公共性」は「公共宗教論」としてしばしば論じられるが、宗教学、宗教研究そのものの「公共性」については主題化されることはほとんどない。宗教学、宗教研究において対象からのデタッチメントや記述的であること、客観性が担保されることによって既に学としての公共的役割を果たしているという暗黙の了解があるのであろう。しかし、隣接諸学においては、他者記述の反省や学の実存理由への反省の中から、公共哲学、公共人類学、公共民俗学、公共社会学などの学的アーリーナが構築されてきて久しい。なぜ、宗教の公共性は論じられても、宗教「学」の公共性、「公共宗教学」の問題は主題化されないのか。近年の *advocacy* についての議論や従来の *religionist* 批判との関連で整理したうえで、「公共宗教学」は果たして可能なのかについて考察を試みる。

4. 宮本発表

ハイデガーは人間を「世界内存在」として捉えた。日常において私たちはその「世界」を実感することがほとんどないが、自力ではどうしようもない「生き難さ」が生じたとき、その「世界」が不動のものではなかったことに気づかされる。「世界」を「コスモス」と言い換えれば、私たちは、普段「コスモス」の中に安住しながらその存在をほとんど意識化することがなく、何らかの形で「カオス」が生じたときに初めて、「コスモス」、およびその中に生きる自分の、脆弱性に気づかされる。「カオス」は必然的に苦悩をもたらすが、苦悩する人たちに寄り添う宗教者は、その人たちが再びコスモスとのつながりを取り戻すことを助けている。本発表では、そのことを宗教の「公共性」につなげて論じてみたい。

なお、コメンテータは、公共宗教論にも詳しい堀江宗正氏(東京大学)にお引き受けいただいている。

軍事占領の宗教学—『占領改革と宗教』刊行とその現代的意義—

米国アーカイブズの現状—占領と宗教学研究—

行政権分離時代の奄美復帰運動—奄美ルネッサンスと諸宗教—

日本占領における英国の対日政策の独自性

占領政策における人種主義と教化の思想

本書刊行の意義と宗教的世界観闘争としての戦争について

代表者：中野 毅

岡崎 匡史 (日米アジア研究所)

田島 忠篤 (道徳科学研究所)

アネメッテ・フィスカールネルセン (創価大)

栗津 賢太 (上智大)

中野 毅 (創価大)

司会：栗津 賢太 (上智大)

本パネルは、第二次世界大戦後の連合国による対アジア占領政策の宗教学的な意味を考察するものである。戦後 77 年が経過してもなお、第二次世界大戦によってできた戦後世界の基本構造は、東西冷戦構造の崩壊以降、イスラーム世界や中国の台頭によって、大きな綻びを見せつつも、いまだに維持されている。

対日占領政策に関する日本における宗教学的研究は、阿部美哉が主導的に推進した共同研究「連合軍の日本占領と日本宗教に関する基礎的研究」(研究代表・井門富二夫、1984-87年)である。この成果は井門富二夫編『占領と日本宗教』(未來社、1993年)として公刊された。しかしこの共同研究と出版にはいくつかの課題が残っていた。それは、①「日本」と言っても本土のみであり、「沖縄・南西諸島」への目配りがなかったこと。②「連合軍」と言ってもアメリカ中心であり、連合軍諸国が、とりわけ天皇制の存続や国家神道に対してどのような考え方をしていたのかが検証されていないこと。③日本の旧植民地諸国における「占領と戦後処理」についても視野に入っていないことなどである。敗戦後の連合軍の占領は、日本本土だけではなく、南西諸島、日本の旧植民地であった台湾、朝鮮半島、南洋諸島などにおいて「複数の占領」があった。それゆえ、これらの地域での出来事を視野に入れた研究によって、初めて占領政策の全体的な把握が可能になるといえる。このような問題意識をもとに、2014年から2017年にかけて日本学術振興会科学研究費基盤研究の助成をうけて、共同研究「連合軍のアジア戦後処理に関する宗教学的研究—海外アーカイブ調査による再検討」を行った。

本パネルでは、この共同研究に関わった研究者を中心に、海外アーカイブの状況、南西諸島の占領、イギリス側の日本理解と天皇観、占領政策の背後にある人種主義や教化の思想、そして占領に関する宗教学的検討が顕わにするものについて考察する。

第1報告では、(1)フーヴァー研究所所蔵史料の紹介とその内容について、(2)米国各地のアーカイブズ史料を紹介し、宗教学の学際的研究に向けて「占領と宗教」に関する研究成果と道筋を報告する。

第2報告では、奄美ルネッサンスと諸宗教の対応について報告する。日本国の行政権が剥奪された「北部琉球諸島米国海軍軍事政府」において、島民はカトリック排斥運動に象徴される宗教統制や軍国主義による圧制から解放されたが、「本土」との公的交流が禁止され、焦土の中、独自の文芸復興運動である「奄美ルネッサンス」における諸宗教の対応について報告する。

第3報告では、日本占領における英国の対日政策の独自性について報告する。英国は、日本の多様性に関するかつての知識と経験から、占領の目的は戦前の日本にも存在した民主主義的な集団と資源を基に日本を再建し、国際社会に復帰させることであると考えていた。日本人はもっと多様であり、神聖天皇もすべての日本人が盲信しているとは考えなかった。ゆえに天皇の処遇についても、君主制の歴史と経験から、天皇制を保持したまま民主化を達成しようと考えた。この英国の独自の対日観、占領への関与を解明する。

第4報告では、メサイア・コンプレックスの状態にあったとさえいわれるマッカーサーの発言や、国家神道の理解とそれを「除去」しようとする占領政策の形成過程の中に、特定の人種主義や独自の宗教的なイデオロギー性があったことを検証する。

第5報告では、『占領改革と宗教』の概要紹介と刊行の意義を述べ、「占領と宗教」研究における「複数の戦後」という視座の重要性、ならびに戦争は文明の闘争、宗教的世界観の闘争であるという面を述べる。そこからアフガニスタンから現在のウクライナ侵攻における宗教問題への視座を考えていきたい。

虚実性の宗教哲学—「宗教」概念の死後の生—

代表者：根無 一行	
創作され破壊される神—宗教概念批判以後の偶像崇拜—	下田 和宣 (成城大)
宗教における演劇性について	山根 秀介 (舞鶴高専)
カント『純粹理性批判』における〈Glauben〉と〈pragmatisch〉	根無 一行 (大谷大)
宗教体験を認め合うこと—私的言語論と言語ゲーム論の狭間で—	古荘 匡義 (龍大)
コメンテータ・司会：樽田 勇樹 (京大)	

私たちは、20世紀後半より主に北米で展開されてきた「宗教概念批判」を正面から受け止めるところから思索を開始している。「宗教概念批判」とは、近代知としての宗教学によって形成されその暴力性に無自覚なまま使用されてきた「宗教」概念を全面的に見直そうとするものである。

ポストモダン思想を積極的に活用する「宗教概念批判」は、ポストコロニアル批評的文脈から、「宗教」および宗教学の覇権の性格の暴露、ないしそれらのいわゆる「死」(無効化)の宣告を中心作業とするが、しかし、「宗教」概念が抱える諸問題を一括で断罪し処理することは、「死」が宣言されてからも様々な領域でなお「宗教」の語りが求められていることを考慮するならば、どこかで問題を取りこぼしているのではないだろうか。

確かに、「宗教概念批判」は、「宗教」概念とそれに基づいて制度化された学問領域を歴史的形成のコンテキストのもとで考察する地平を開いた点で積極的意味を有す。しかし、「宗教」概念の賞味期限切れをただ確かめてそれを廃棄するのではなく、むしろそうした期限切れの概念の死後生(Nachleben)の領域へと目を転ずることもまた必要なのではないか。

ここで想定される応答の一つとして、いまだ西洋的な「宗教」概念に回収されない非西洋的「宗教」が無数に営まれているという事実の強調が考えられる。しかし、それだけでは不十分である。そこで前提とされている「宗教」概念こそが問題視されているからである。

必要なのは、西洋的であれ非西洋的であれ、たとえば「信仰／儀礼」といった二項対立を崩していきながら、従来の思弁的、あるいは体験的な宗教哲学とは異なる研究地平、すなわち、「これは宗教か?」という仕方で西洋が行使してきた虚実の峻別の場面に立ち戻ることである。「宗教」という言葉がいかに関与せられ、どのように機能するのか。嘘でもでっちあげでも、とにかく「宗教」という言葉に何かを見込み、そこに託さざるをえ

ない状況とはいかなるものか。このような視座を構えることは、「宗教」概念を断罪するのは別の仕方、人間学的事実へと思考を開くことにつながるのではないか。私たちのこれまでの多くの討論の中から、「宗教」の真実性と虚構性をめぐるとして浮かび上がってきた。本パネルでは以下の4人の発表者が、「宗教概念批判」を踏まえながら、それぞれの宗教哲学研究の専門領域からこの問題への応答を試みる。

下田は、偶像崇拜とその禁止をめぐると・ブロスやラトゥールの議論を参照し、「異端的」虚実性と其の破壊許可の両者の根底にあるはずのフェティッシュな衝動を主題化する。

山根は、エリアーデやバタイユ、モーリスらの祭儀論を検討し、そこから「演劇性」という視座を引き出すことによって、「内面的、個人的、精神的な信仰、一回性が決定的な意味をもつ宗教体験」と「外面的、集団的、身体的で、反復性を前提とする祭儀」とを峻別し前者を真なる宗教を成す要素としてきた二分法に揺さぶりをかける。

根無は、「祈りにはそもそも希望はない」というデリダの洞察を起点にして、「自己への嘘」というアポリアの経験を、カント『純粹理性批判』を手掛かりに、〈神が「仮象」だと承知の上で希望なしに祈ること〉として描き出す。

古荘は、宗教体験を得た者たちの語り合いをウィトゲンシュタインの言語ゲーム論と私的言語論の狭間で捉え、体験を認め合う者たちの語りや行為の間にあるズレが、互いのうちで自分と相手の体験を認めさせることを示す。

コメンテータの樽田は、哲学ないし宗教哲学の立ち位置から4人の提題を総括することで、ポストコロニアル批評を含んだ宗教概念批判に対して各提題がもつ応答的意義を再確認し、本パネルとフロアとを橋渡しする。

Esotericism, Occultism, and Spiritual Therapies during the Long Twentieth Century: Theoretical Implications

Convener : Ioannis GAITANIDIS

What Is “Lived Religion” Made of? Rethinking “Religion” in Contemporary Shamanism	MURAKAMI Aki (Komazawa Univ.)
A Global Spiritual Business: Modern Mystery School	Stephen CHRISTOPHER (Univ. of Copenhagen)
Orthodox but New, Secret but Popular: Reconsidering <i>Mikkyō</i> ’s Boundaries in the 1970s	HAN Sang-yun (Tohoku Univ.)
Neurosis and Mental Cultivation in the 1930s: Morita Therapy as <i>Seishin Shūyō</i>	Sarah TERRAIL-LORMEL (INALCO)
Commentator : Erica BAFELLI (Univ. of Manchester)	
Chair : Ioannis GAITANIDIS (Chiba Univ.)	

In the last twenty years, the academic study of esotericism has flourished as a distinct area of interest for historians, sociologists, and other scholars of religion around the globe. During the same period, Professor YOSHINAGA Shin’ichi almost singlehandedly opened this scholarly field to case studies from Japan. As a result, he contributed to building an East Asian history of ideas and spiritual practices once ignored or rejected by religious studies scholarship. These academic treatises of esotericism and occultism have subsequently centred around the description of colourful individuals, their philosophical or therapeutic theories, and their intellectual networks or associations of followers. A characteristic feature of these phenomena is that they transcend modern categories, such as science, religion, belief, business, education or cultivation. But is that everything that an analysis of esotericism can show us? This panel seeks to extend the theoretical implications of the academic study of esotericism beyond a critique of modern conceptual categories. The papers employ new case studies to illustrate how popular scholarly arguments related to the concepts of “lived religion,” “commercial religion,” “cultic milieu” and “self-cultivation (*shūyō*)” could be consequently revised if not rejected altogether.

More specifically, in the first paper, MURAKAMI Aki argues that the concept of lived religion (LR) presents similarities with what Japanese anthropologist of religion, SASAKI Kōkan, envisioned in his concept of “lived (*seikatsu*) Buddhism,” which he employed to describe the totality of Buddhist doctrine, Buddhist practitioners and folk practice, from the viewpoint of shamans, priests and other professionals. By relativising the assumption that there is a boundary between everyday life and “religion,” Sasaki came very close to the idea of LR. Yet, like LR, he identified “religion” with established religious traditions, such as Buddhism, and overlooked how individual religious practice also stems from the complex interplay between non-established (“esoteric,” “occult” and “novel”) religious ideas and other aspects of daily life, such as politics, economics and the media. Now that we know this, Aki asks how we could today conceive of the “lived religion” of a contemporary shamanistic practitioner.

The second paper considers the case of the Modern Mystery School (MMS), perhaps the largest and most organizationally stable company, offering seminars, workshops and training classes on spiritual therapies in Japan today. Through interviews with MMS teachers and students and participant observation of MMS’ events, Stephen CHRISTOPHER explores how the nation of Japan and the “Japanese people” are woven into the theological beliefs of the company, which

ecumenically mixes from Theosophy, Shingon Buddhism, Tibetan Buddhism, Wicca, magick, reiki, universal Kabbalah, and a variety of homeopathic therapies. To this, Stephen adds a series of entrepreneurial ideals, such as the individualisation of services and the self-branding of the practitioner, to illustrate why MMS could be conceptually reduced neither to a commercialised religion nor to a religious corporation. The modern period is prosperous with examples of such “global spiritual businesses,” and Stephen will help us understand why MMS is not just a “commercial religion.”

In the third paper, HAN Sang-yun identifies links between popular novelists and contemporaneous religious leaders through an examination of texts that were published in the year 1972 and which purported to be introductory exegeses to *mikkyō* (esoteric Buddhism). By showing how these authors influenced each other and played with and around the occult/revealed boundaries imagined by their audience regarding the established tradition of Buddhism, Sang-yun critiques the concept of “cultic milieu” as an unspecified realm of novel and non-normative ideas. Her presentation, on the contrary, demonstrates that even if such a milieu exists, it is significantly porous and, at times, ideologically conventional. These findings beg the question: does a cultic milieu or some similar conceptualisation of an “underground source of occult ideas and practices” really help us understand how “religious booms” (such as the 1970s occult boom) occur?

In the last and fourth paper of this panel, Sarah TERRAIL-LORMEL, goes even further back in time, to the early Shōwa period, and examines the concept of “self-cultivation” (*shūyō*) in the psychotherapeutic practice developed by psychiatrist MORITA Masatake (1874–1938). Although recent scholarship has emphasised the many commonalities of Morita therapy with popular contemporary methods of “mental cultivation” (*seishin shūyō*) — such as its conception of the workings of the mind, moral ideals, social critique, clinical setting, etc. —, these discussions are usually based on texts produced only by scholars and other intellectuals. Sarah reveals a different angle of “mental cultivation,” namely that which was espoused by Morita’s “neurotic” patients. This material sheds new light on the experience of (psycho)therapy as a quest for healing and purpose in pre-WWII Japan.

Finally, the discussant of the panel, Erica BAFELLI, will help us draw the four papers’ arguments together and, through vignettes from her research on the “new religion” Agonshū — which could be approached from all of the perspectives discussed in this panel —, will consider the limitations of descriptive adjectives such as “new,” “occult,” “lived” and the like to talk about non-established religion.

陰陽師の虚像と実像

日本古代の陰陽師の成立と変遷
日本中世における官人陰陽師と非官人系陰陽師
「朝廷陰陽師」像の近世
「博士」とその周辺

代表者：小池 淳一
細井 浩志 (活水女子大)
赤澤 春彦 (撰南大)
梅田 千尋 (京都女子大)
小池 淳一 (国立歴史民俗博物館)

コメンテータ：マティアス・ハイエク (高等研究実習院)

司会：小池 淳一 (国立歴史民俗博物館)

新陰陽道叢書(2020～2021年)の刊行によって、陰陽道研究は新たな段階に入ったといえる。従来の陰陽道研究の蓄積をふり返り、それらの成果をもとに新たな課題がいくつか見出された。このパネルでは、陰陽師が担った技術や呪術、知識や行為を素材に、時代ごとの実像とそれによって生じたであろうイメージ、すなわち虚像について考えてみる。それによって陰陽道の通史にむけての展望を切り開きたい。

古代の陰陽師については、細井浩志が「日本古代の陰陽師の成立と変遷」と題して報告する。8世紀に、9世紀以降の陰陽師に近いのは呪禁師であり、陰陽師は占いのみを職掌とする官職であった。だが人材的に両者は重なっていたため、8世紀末前後に統合されて、呪術・祭祀や暦日・方角禁忌の勘申も行う陰陽師が成立する。9・10世紀に陰陽師の活躍は顕著になり、官職の陰陽師ではないが、陰陽道の術で朝廷に仕える、官人陰陽師が成立する。また官人身分ではないが、陰陽師として活動する法師陰陽師も登場する。こうした変遷を、近年、研究が進む当該期の気候変動の影響も織り込みながら、述べたい。

中世の陰陽師については、赤澤春彦が「日本中世における官人陰陽師と非官人系陰陽師」と題して報告する。赤澤はこれまで朝廷や幕府で活動する官人陰陽師の実態について検討してきた。彼らは賀茂保憲や安倍晴明の子孫たちを頂点とする官人集団を形成して国家や権門に奉仕する存在であった。一方で中世社会には官人身分ではない陰陽師、寺社を活動の基盤とする陰陽師、あるいは陰陽道の知識に基づく占術や呪術を行う者たちなども確認できる。本報告では安倍晴明に代表されるような官人陰陽師だけでなく、社会で活動する陰陽師も含めて、主に

日本中世前期における多様な「陰陽師」像を析出してみたい。

近世の陰陽師については、梅田千尋が「朝廷陰陽師」像の近世」と題して朝廷周辺の陰陽師をめぐる虚像と実像について取り上げる。近世の陰陽師とは、土御門家が発行した陰陽師免許を取得した者であり、朝廷/民間といった区分は、近年用いられなくなっている。一方、陰陽道本所の地位を確立した土御門家代々当主は、安倍晴明子孫という系譜を主張し、朝廷祭祀に関わる古典的宮廷陰陽道の復元を試みていた。同時に、陰陽道の他天文や占いの門人も抱え、天文暦学の領域でも一定の存在感を示していた。こうした朝廷を基盤とする陰陽頭に対する、同時代の認識や評価はどのようなものであったのか。とくに学知に関わる領域で現れた虚実を伴う言説を明らかにし、実像との差異について検討する。

そして、民俗文化の中の陰陽師については、小池淳一が「博士」とその周辺」と題して、民俗のなかでの陰陽道系宗教者としての「博士」について諸資料を確認し、その職能について、説話や祭文といった伝承にも目配りしながら論じてみる。民俗のなかの陰陽師は明確なまとまりとしては抽出しにくい、民俗信仰やまじない、占いの伝承のなかで見出すことができ、それらは一定の歴史的な深度を有しているとともに、中近世の陰陽道の展開ともかかわっていることが推定できる。

コメンテータは、陰陽道に限らず、前近代日本の古い文化に関する広範な研究蓄積を持つマティアス・ハイエク氏(フランス・高等研究実習院教授)にお願いし、陰陽師の活動の基盤となる知識体系の意義と位置づけについて、各時代や領域に通底する問題を論じていただこうと考えている。

井筒俊彦と東洋の思想家たち

井筒俊彦の東洋哲学における「禅と哲学」の問題	代表者：澤井 真 長岡 徹郎 (京大)
井筒俊彦の『老子』理解を分解する	古勝 隆一 (京大)
井筒俊彦とシャンカラマーヤー論と二真理説	加藤 隆宏 (東大)
井筒俊彦とイブン・アラビーアラビア語の『存在』概念	澤井 真 (天理大)
	コメンテータ：鎌田 繁 (東大)
	司会：澤井 真 (天理大)

井筒俊彦(1914-1993年)は、自らの東洋哲学を構築する過程で東洋に広がる諸テキストを精読した。彼は多言語にわたるテキストの精緻な読解に基づきながら、「東洋」の諸思想に一つのパターンを見出した。井筒が構築を目指した「東洋哲学」とは、東洋の諸思想から抽出された共通の思想的枠組みであり哲学的構造である。このとき、東洋の古今東西に広がる諸テキストは、彼が想定した西洋的な構造とは異なった東洋的なそれを有するものとみなされた。

東洋哲学を構築するという過程において、井筒は、哲学者や思想家という人物よりもむしろ、彼らが書いたテキストに重きを置いた。しかしながら、井筒が東洋哲学を構築するうえで読解された哲学思想は、テキストに思考を織り込んだ思想家たちが存在する。言い換えれば、井筒の東洋哲学は、イスラーム、仏教、老荘思想、儒教などの宗教的背景、ならびに思想家が用いた言語的背景に根差していた。さらに、それぞれの宗教伝統のテキストを読むうえで、井筒は先行研究や研究成果を参照してきたことを踏まえるならば、井筒の東洋哲学もまた時代的制約のなかで創出されたものであると言える。

こうした問題意識から、本パネルでは、井筒の東洋哲学が構築されるうえで不可欠であった、テキスト読解のコンテキストを、テキストを著した思想家や執筆言語のみならず、当時の研究状況を含みながら総合的に理解することを試みる。それによって、井筒自身が「東洋哲学」の名の下に諸思想をいかに落とし込んだのかを明らかにしたい。具体的に、各パネリストは、井筒が扱った諸テキストと同様の思想家や言語を自らの研究分野において扱いつつ、彼がテキスト読解で用いた先行研究を参照しながら、井筒の議論を考察する。

長岡徹郎は、「井筒俊彦の東洋哲学における「禅と哲学」の問

題」において、日本哲学(日本語)、特に京都学派の哲学の立場から考察を行う。井筒は、いかにして反哲学的性格をもつ禅から、新たな哲学の創造に向けた哲学的可能性を引き出そうとしたのか。同様の問題を共有した京都学派の哲学を手がかりに、井筒自身が「禅の自己哲学化」と呼ぶ禅の思想理解の独自性について論じる。

古勝隆一は、「井筒俊彦の『老子』理解を分解する」において、中国思想、特に老荘思想(中国語の文語)の立場から考察を行う。井筒が『老子』の説く「聖人」を如何にとらえ、『老子』英訳に反映させたのかを問う。また『老子』に含まれる韻文部分について、井筒が施した翻訳上の処置についても論ずる。

加藤隆宏は、「井筒俊彦とシャンカラマーヤー論と二真理説」において、インド思想(サンスクリット語)の立場から考察を行う。シャンカラの思想は「幻影主義的一元論」と評されるが、井筒はこれをシャンカラ(派)のテキストからどのように読み取ったのか。井筒のいう「絶対無分節的有」に焦点を当てつつ考察する。

澤井真は、「井筒俊彦とイブン・アラビーアラビア語の『存在』概念」において、イスラーム哲学(アラビア語)の立場から考察を行う。「存在する」と翻訳されるアラビア語には、「ワジャダ」と「カーナ」がある。クルアーン研究からイスラーム哲学研究へ歩みを進めた井筒が、東洋哲学の構築を志向するうえでイスラーム研究が果たした役割について考察する。

さらにコメンテータである鎌田繁は、井筒が目指した東洋哲学が有する思想と言語の関連性から、各パネリストに質問を行う。全体討議においては、井筒が東洋の諸思想を東洋哲学としていかに昇華していったかを検討する。

寺院経営と護持の展望—布施・寄付・会費—

布施の構造—対価・贈与・喜捨—

お寺への遺贈寄付とソーシャル・キャピタルに関する実態調査
寺院の護持状況について—本願寺派宗勢基本調査の結果から—
変動期・変革期における寺院仏教の運営基盤

代表者：深水 顕真

深水 顕真 (広島文教大)

松本 紹圭 (未来の住職塾)

長岡 岳澄 (中央仏教学院)

櫻井 義秀 (北大)

司会：櫻井 義秀 (北大)

人口の減少は、寺院経営と護持に直結する課題である。『人口減少社会と寺院—ソーシャルキャピタルの視座から—』(櫻井義秀・川又俊則編 2016 法蔵館)では、人口減少が寺院の活動に与える影響と、ソーシャルキャピタル(社会資本)としての寺院の可能性に多面的な議論を提供した。

確かに人口の減少に伴って、寺院活動の主たる担い手となる檀信徒の軒数は減り、それに伴って寺院の「総収入」は量的に減少する。いうまでもなくこの「総収入」とは、拝観料や不動産収入などの例外的なものを除けば、檀信徒による布施、寄付、そして会費であり、現在の大多数の寺院がこれらによって経営、護持されている。

一方で、社会構造の変化が寺院の「総収入」の質にどのような変化を与えているかについては、これまで十分な議論が尽くされていない。本パネルの目的は、「総収入」を構成する布施、寄付、会費といった寺院経営と護持の基盤が、人口減少という社会構造の変化の中でどのような影響を受けるのか量と質の両面から検討するものである。

浄土真宗本願寺派の「宗勢基本調査」に代表される教団が行う俯瞰的な統計調査は、布施、寄付、会費の量的な変化をとらえる上では有効である。しかし、その質的な部分についての議論は、個別の寺院の収入状況や檀信徒の個人情報と密接に関係するため、新田光子による「ある真宗寺院の経済事情」(ソシオロジ 30 巻 (1985-1986) 2 号)等に限定され充分に行われてこなかった。さらに布施、寄付、会費は、地域的な背景や、宗教・宗派の教義によってその位置づけが異なるため、それらに通底する一般論としての議論も行われていない。

本パネルでは、発表者が関わったインタビュー調査、アンケート調査、統計調査等それぞれの調査に基づく発表を行い、布施、寄付、会費の量と質の変化を捉えていく。さらに、発表

者とフロアを含めたパネル参加者が相互に議論をすることで寺院経営と護持の展望に迫っていく。

【深水】

広島県の一地域にある複数の浄土真宗寺院住職へのインタビュー調査から、布施の構造について分析を行う。特にインタビューで見られた「葬儀のお布施がない」という事例から、布施に「対価・贈与・喜捨」の3つの層が構造的に存在し、社会変化の中で、それぞれの層が布施の金額決定に与える要因が変化していることを論じていく。

【松本】

ソーシャルセクターで注目を集める「遺贈寄付」は、これからのお寺の経営にとってどのようなインパクトを持ちうるのだろうか。本研究では、寺院を含むソーシャルセクターにおいて、経営資源として重視されるソーシャル・キャピタル(社会関係資本)が、寄付を導く重要な要素となっているとの仮説をたて、寺院における遺贈寄付の実態を調査、分析した。

【長岡】

浄土真宗本願寺派が実施している宗勢基本調査の結果から寺院の経済基盤について考察を加えていく。過去の研究において、寺院の経済的基盤(寺院収入)は、門徒戸数に影響され、門徒戸数が葬儀回数や年忌回数、寺院の教化活動に影響することを指摘したが、本発表においては、そこから、地域や寺院の護持形態の違いによる寺院護持の差異について見ていく。

【櫻井】

人口減少、家族構造の変化、地域社会変動によって宗教施設の維持・存続が困難になっている要因について比較宗教社会学的視点から考察し、同時に、僧侶の地位と檀徒のメンバーシップが世襲困難であれば、どのような展望がありうるのかを試論的に述べてみたい。

宗教における AI 等先端技術の社会実装とその課題

代表者：木村 武史

スピリット・テック研究の動向ー瞑想誘導技術に焦点を当ててー	木村 武史 (筑波大)
仏教対話 AI「ブダボット」の開発状況と今後の展望	熊谷 誠慈 (京大)
食品表示ラベルの画像認識によるハラール判定支援アプリの開発	石田 友梨 (岡山大)
立正佼成会の信仰活動と人工知能活用の境界領域	橋本 高志 (筑波大)
宗教が関わる AI 倫理の共有可能性	濱田 陽 (帝京大)
司会：木村 武史 (筑波大)	

本パネルでは、AI を含めた先端技術の宗教領域における応用と社会実装の具体例等を取り上げ、科学技術の発展がもたらす宗教への影響について討議する。特定の宗教に関連する具体的な事例が持つ個別的な課題について議論するとともに、技術革新がもたらす人間理解の変革についても考察を行う。

木村武史「スピリット・テック研究の動向ー瞑想誘導技術に焦点を当ててー」

発表要旨：ウェスリー・J・ヴィルドマンとケイト・J・ストックリは、『スピリット・テック：意識のハッキングと啓蒙主義的エンジニアリングの勇ましい新世界』（2021年）で、欧米でマインドフル瞑想が広まるに伴い、瞑想を支援、誘導する技術をスピリット・テックと呼んで考察を加えている。これらの技術は瞑想の状態を脳波で測定できるという前提で、より瞑想に相応しい脳波の状態になっているのか表示する、あるいは脳に振動波を与え、深い瞑想の状態を引き起こすという。本発表では、スピリット・テックの問題について考察を行いたい。

熊谷誠慈「仏教対話 AI「ブダボット」の開発状況と今後の展望」

発表要旨：わが国では仏教離れが進んでいる一方で、人々を仏教に惹きつけようとする取り組みも行われている。発表者らは、仏教界側からの要請に応える形で、人々がより簡便に仏教の教えに触れることができるよう、仏教経典を人工知能に機械学習させて作ったチャットボット「ブダボット」を公表した。現状、学習データアルゴリズム等の精度に問題はあっても、今後改良を重ねたうえで、様々な展開も想定している。本発表では、ブダボットの開発状況と今後の展開について概説し、社会実装に際するメリットとリスクの両面について報告する。

石田友梨「食品表示ラベルの画像認識によるハラール判定支援アプリの開発」

発表要旨：現在、観光政策としてムスリム対応を掲げたことも

あり、ハラールへの認知が高まってきた。小売店において販売されている食品がハラールかどうかの判断を支援するアプリはいくつかあるが、すべての商品を登録することは不可能に近い。そこで、本研究では食品表示ラベルのアルコールや豚肉と関連する言葉がある場合に反応するよう機械学習させることにした。食品表示ラベルの収集にあたっては、ゲーミフィケーションの要素を取り入れて市民参加型にすることで、イスラーム教徒と非イスラーム教徒の協同を目指す。

橋本高志「立正佼成会の信仰活動と人工知能活用の境界領域」
発表要旨：宗教界では、AI を活用する動きがある一方で、AI を導入することへの抵抗感もある。この相違は、AI に関する知識と各宗教の自らの宗教についての理解との相互作用によって生まれてくるのではないかと。AI の研究についての理解だけでなく、Siri などの利用、大衆による影響から AI について肯定的または否定的なイメージを抱くと思われる。また、宗教には信仰の対象や教義・教え、教祖・開祖を含めた宗教指導者など、聖域とみなされる領域がある。本発表では、立正佼成会を事例に、信仰者が AI の導入を許容できる境界領域について議論したい。

濱田陽「宗教が関わる AI 倫理の共有可能性」

発表要旨：今日、AI の利用で最も危惧されているのは軍事分野における応用といえるが、宗教そのものの理解促進や、宗教文化に資する目的での試みも含め、人間活動の広大な分野に及んできている。そうしたなか、カトリックの AI 実装への応答例は、それが、技術や宗教外に留まらず、宗教内への応答へと自己言及してくる事態の予兆とも思われる。ヴァチカンが出した Rome Call for AI Ethics (2020年2月) とそれを取り巻くカトリック外（企業などを含めた参加、賛同などの反応）の状況から汲み取れる示唆について、AI 倫理の共有可能性と不可能性の行方を展望し、考察を試みる。

震災伝承の宗教性－施設・担い手・行為・環境－

問題提起－震災伝承の宗教性－	代表者：弓山 達也
ホープツーリズムと宗教文化表象－福島県浜通りの震災伝承施設－	弓山 達也 (東京工業大)
震災伝承の連続性と宗教者・市民の関与－南三陸を事例に－	小高 絢子 (東京工業大)
気仙三十三観音霊場における再興と伝承	齋藤 知明 (大正大)
インドネシア・アチェのスマトラ島沖地震の記念施設と震災遺構	君島 彩子 (日本学術振興会)
	福田 雄 (ノートルダム清心女子大)
	司会：弓山 達也 (東京工業大)

東日本大震災から10年が経ち、被災地各地に震災の記憶・記録を後世に伝える「震災伝承館」が開設されている。一般財団法人3.11伝承ロード推進機構は、震災伝承施設を指定・分類し、震災伝承館など、一定の規模を有する施設を「第3分類」として現在59カ所を指定している。かかる施設の運営は国・地方自治体やその外郭団体が中心であるが、ここに指定されなくても、企業や民間・個人が運営する同様の施設もあり、また記念碑、追悼施設、震災の記憶を留める遺構といった第1・第2分類を含めると、震災伝承施設の裾野は広がっていくものと思われる。

本パネルの目的は、震災に関わる伝承の施設や担い手やその行為や環境において、宗教性がどのように表出しているかを検討することにある。予備調査では追悼や鎮魂といった宗教的側面をクローズアップする施設や、宗教的行為そのものに伝承の役割があることが確認された。その一方、全く宗教的側面に触れない施設や伝承形態もあることが判った。復興の象徴としてなぜ「祭り」の再開が重要視されるのか、殉職者を「お星様」「天使」とする表現形態を宗教的にとらえていいのかも議論の余地のあるところだろう。

公共の伝承施設などの震災伝承に宗教性を見出そうとする時、宗教者や宗教施設(資源)を通じての記憶・記録の伝承との比較も必要となろう。先の追悼と鎮魂は公共施設で扱うる宗教性なのか、宗教者や宗教施設(資源)が醸成する宗教性と同様なのか、政教問題・信教の自由との抵触も含め、吟味してみたい。さらに海外の同様な施設との比較も興味深い。このように災害の伝承における宗教性をめぐって、同一災害の異種セクター間の比較、異なる災害の伝承施設間の比較、さらに国際比較や戦禍・公害・病いに関する伝承施設・形態との比較も可能であろう。苦難に直面したり、そこからの解放を目指そうとしたりする時の宗教的表象に関して、次のような各報告から構成される本パネルは、一定の知見を提起できる

と確信している。

弓山は問題提起を含め、上記の震災伝承館のうち福島県浜通り地域にある施設を中心に、主なものを概観し、そこで寺社などの歴史的な宗教施設といった組織の次元、年中行事や人生儀礼といった行為の次元、生きる意味や目的の探求といったスピリチュアルな次元に注目し、それぞれがどのように表象されているかを検討する。

小高もこれら浜通り地域の震災伝承館を事例に、弓山報告を一步進め、展示内容や構成に見られる言説と、福島県が掲げる「ホープツーリズム」との関わりに注目し、目指される未来志向型のツーリズムについて、他の震災遺産を巡るダークツーリズムとも比較しながら言及を試みる。

齋藤は宮城県南三陸町における震災の経験が、地域住民から県外訪問者へ、そして訪問者から訪問者が活動する地域の拠点へ、どのように伝わっていくのかを考察する。そしてその際、宗教者がハブになっているケースも論じながら、震災伝承の宗教性も併せて論じていく。

君島は東日本大震災によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市、陸前高田市、住田町にまたがる観音霊場「気仙三十三観音」での調査をもとに、観音堂や観音像などの物質的な再生と、震災の支援に関わった僧侶による三十三観音巡礼の再興という活動についての検討を行い、震災後に新たな意味を有した観音巡礼が震災の伝承において果たした役割について論じる。

福田は2004年に発生したスマトラ島沖地震をめぐり、インドネシア・アチェ州の津波を記念するいくつかの施設や震災遺構を対象とする。震災から10年を過ぎて以降、震災を記念する施設がどのような展示を行い、また震災遺構がどのように地域社会で保存されているかを、主として2014年から2019年にかけて行ったフィールドワークで得られたデータをもとに報告する。

2022年7月5日発行

編集・発行 日本宗教学会第81回学術大会実行委員会

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12

愛知学院大学文学部宗教文化学科内

HP : <https://jpars.org/conference/>